

『恐れることはない』

菅原 伸郎

初めまして。ご紹介いただきました菅原です。この春まで、朝日新聞学芸部の記者をやっておりました。退社して、つまり自由の身になってまだ日が浅く、新しい人生はまだ見えてこない、そんな状況でございます。東京本社版に「こころ」のページというのがありまして、九年前からその担当をしておりました。それまでは、映画の担当とか普通の新聞記者をしていたのですが、五十三歳の時にこのページをやらないかと言われてまして、喜んでさせてもらいました。その取材の中で、高崎直道先生や木村清孝先生にお目にかかるようになり、今日のご縁ということになったわけです。今日はちょっと変な題なんですけれども、最初に私の経験をお話したいと思えます。

大峰山で

去年の七月の初め、奈良県吉野の大峰山というところへ行ってきたんです。いわゆる山伏の修行、修験道の中心地です。そこには、奈良時代に役小角えんのおづのという人が開いたお寺があります。その役行者えんのぎょうじやのために、七月七日に葛城山かつらぎさん

の麓にある池からハスの花を切ってきて大峰山の頂上まで担ぎ上げる「蓮華入峰<sup>れんげにゅうぶ</sup>」という行事があるんですね。一般の人も参加できるというので、知り合いの宗教学者や弁護士さんと一緒に参加してきました。二泊三日で「わか山伏」になるんですが、全部で一七〇人くらい参加していました。あそこは女人禁制の最後の山ですから、全部男ばかりです。だいたい普通の日に二泊三日も休暇をとれる人は働き盛りの人ではなくて、かといって山に登るものですから、そう年配の人もいないわけで、五十代から六十代前半くらいの人ばかりなんです。毎年来ている人もいまして、「どうして来られたんですか？」と聞くと、それぞれやはり何か心の悩みのようなものを持っていて、「毎年ここに参加すると気持ちが良いものですから」とおっしゃる人が多かったです。

夕方に集合になりました、そこで仮眠をして午前二時に起こされまして、午前二時から山に登り始めるんですね。最初は桜で有名な吉野山の辺りをずーっと通過しまして、一七〇人ですから三〇〇メートル以上の列になってゾロゾロ歩いていくんです。夜が明ける前に歩き出して、しばらく行くとだんだん夜も明けてきます。町中を過ぎて奥千本というような所を過ぎますと、「六根清浄、懺悔<sup>ざんげ</sup>、懺悔」という掛け声を本職の山伏の人が掛けるんです。山伏の人が「ロッコンショウジョウ」と言うと、我々が「サーンゲサンゲ」と言って掛け声をあげながら登って行く。その辺の話をするとう時間がかかってしまいますので省略しますけれど、どんどん登って行きますと、途中で女人禁制という結界門があります。「ここから先は女性は駄目ですよ」という門です。実際はこっそり登っている女性もいるみたいですが、とにかく表向きは女性は駄目なんだという門を過ぎまして更に登って行きます。すると、「鐘掛岩」という岩があるんです。絶壁がありました、それをよじ登る。この山は昔から有名で、例えば平安時代に関白の藤原道長が書いた登山日記も残っているんです。そういう行場<sup>ぎょうば</sup>で、ちょっと危ないことをやることは昔から行われていたみたいなんです。

鐘掛岩はまだたいしたことないのですが、それからもうちょっと行くと有名な「ノゾキ」というのがあるんです。岩の下が二〇〇メートルくらい切り立ったところがあって、下の方に小さいお宮がある。そこに来ますと、番をしている山伏さんが三人掛かりで紐をかけてくれまして、押し出すんです。最初二人掛かりで足を押さえていまして、もうひとりの人がロープで番をしているんですけれど、前の人がやっているのを見てみると、若い人だと「親孝行するか」と言うんですね。そうすると皆、「はい」と言う。ちよつと年配の人ですと、「奥さん大切にするか」なんて言われて、「はい」と慌てて返事をするわけなんです。私も紐をかけられまして、ああ自分の番が来たなあと思つたら、スーッと押し出されて……。ところが自分が、何を聞かれたかよく覚えていないんですね。とにかく何か言われたらすぐ「はい」と答えなきゃいかんと思ひまして、とにかく「はい、はい！」と返事をしましたら、すぐには引き上げないでもう一回グッと前に出して、それから引いてくれるんです。あとで考えてみても、何を聞かれたのか覚えていないです。とにかく「はい、はい！」と言ってそれきりなんです。そういうようなことをノゾキと言うんですね。

それを過ぎてさらに登ると、最後に裏行場というのがありました、これもちよつと危険な所、絶壁をソロソロソロと歩きながら渡る、そういう場所が何箇所かあるわけです。実は私は山登りが趣味なものですから、絶壁そのものはいしたことはないと思つたんです。ただ、山登りをする人だったらなるべく安全に行くというのが普通なんです。なぜ、わざわざ恐いことをさせるんでしょうか。ちよつと悪趣味だなあという感じもしたんです。それで、一緒に行った仲間の、日蓮宗のお坊さんに「何でこんなことするのかなあ」と聞いたら、「娑婆しやば、つまり我々の日常生活での自我を壊すためじゃないか」と教えてくれました。確かに、ヒョイと前へ出されて「親孝行するか」と言われて「いや、ちよつと考えさせてください」なんて言えないんですね。とにかく「はい、はい！」と答える。

「奥さん大事にするか」と言われても、「いろいろ言いたいことがあるんだけど」なんて考えていられない。「はい」と、とにかく言う。「無」とか「空」とか、そんな立派なことを考えている場合じゃない。動物的本能で、とにかく「はい、はい」と返事をするわけなんです。そういうことをやって二泊三日で帰ってきたんです。これは一応、修行なんですね。ただ、それで宗教的に立派な人間に少しでも近づいたかというところ、全然そうじゃないんです。引き上げられたらもとの木阿弥もくあみ。親孝行だとか女房孝行のことなんて、全く誰も覚えていないんじゃないかと思うんですよね。ただその瞬間「はい」と返事しただけであって、何か宗教的にひとつレベルがアップしたかというところ、そんなことはないんじゃないでしょうか。絶壁も、通りすぎればもとの木阿弥という感じがしました。ですから、宗教心というのはこういうもので育つかなあと思ったんです。

#### 恐怖・心配・不安

そこで今日の題を考えてみたいんです。結局、恐怖、恐いというのはどういうことか、宗教につながるものなのか。私は、そうじゃないんじゃないかと思いました。恐怖というものは未知なものとか危険とか、そういうものに対する動物的な反応だろうと思うんですね。例えば、だんご虫をチョンとつくとクルクルと丸くなりますよね。カメラだと首や手足を引っ込めます。防衛本能じゃないかと思えます。そこであれこれ考えたりということは全然ないわけです。例えば、強盗が入ってきて急に刃物を突きつけられれば、頭の中は真っ白になって、相手の顔とか特色を覚えている余裕もなくなるわけです。あるいは、山登りをしていて熊に出会うと立ちすくんでしまう。その時は受け身の感情で、頭が正常に動いていないと思うのです。本能的に逃げるか、しゃにむに抵抗するか、とつさに気絶したふりをするか、そんなことしかできない。考えてみますと、恐怖には何か対象があるんですね。

熊とか強盗とか絶壁という原因があるんです。熊を追い払えば恐怖はなくなる。それは宗教とはちよつと違うんじゃないかと思うんです。恐怖というのは一時的なものでして、その時は大変なんだけれども、過ぎればもとの木阿弥になってしまふ。「助けてくれ」といつて土壇場の神頼みをするわけですけども、そこから本当の宗教心というのが生まれるのかなあと思つたわけなんです。

似たようなことと言えば、恐怖じゃなくて、「心配」というのがありますね。例えば、癌がんがこわいとか言いますが、正確に言えば癌が心配だということなんです。それは恐怖の少しゆつくりしたもの、と言えるんじゃないかと思うんです。あれこれ心配する。しかし、これは宗教で解決するとかしないとか、宗教につながっていくとか、そういうものかという、そうじゃないように思うのです。絶壁からロープでぶら下げられて、ロープが切れるんじゃないかとかあれこれ心配する、それは本当の宗教に結びつく感情じゃない。こういうことは、いろんな人が言っています。浄土真宗の人で、明治時代に清沢満之きよざわまんしという思想家がおりました。《将来に苦痛を想像して（之を杞き憂ゆうと云ふ）恐怖するは妄念なり、煩惱なり、決して之を為す勿なれ》（『有限無限録』八〇、岩波書店『清沢満之全集』第二卷所収、二〇〇二年）と書いておられます。この人は一〇〇年くらい前に結核で長い間病氣をして亡くなつたんですが、その死期が迫っている時に書いた文章なのです。「死が恐い」という問題も含めて書いているんでしょうが、「死ぬ時に痛いんじゃないか」などということ想像して恐怖するのは妄念だ、煩惱なんだといつていいわけです。

恐怖や心配を更に考えていきますと、「不安」というのがあるんですね。似たような言葉なんですけれども、ちよつと違うんです。恐怖より不安のほうがちよつと宗教のほうに近づいてくるように思うんです。恐怖と不安はどこが違うかというと、恐怖というのはさつき言いましたように対象があるんです。原因があるんですね。ところが

不安というものには対象がない。なんとなく心が安定していないということ。特定の対象を持たないということとは、つまり外側、どこか向こう側に原因があるんじゃないんです。そもそもこっち側に原因があるという感じがするんですね。原因がはつきりしない。もちろん、恐怖と不安というのは密接に関係があるんですけども、例えば、さつき強盗に刃物を突きつけられた、その瞬間は恐怖で頭の中が真っ白になって何も考えられないと申しました。けれども、強盗に縛られて転がされていると、そこにじっとしている時は、もうたぶん恐怖という感情から不安という感情へ移っていると思うんですね。「この先どうなるんだろう」と。目の前にすぐナイフがあるというんじゃない、このままいつたらどうなるんだろうなあ、やっぱり殺されるのかなあ、あるいは、うまく助かるかなあ、といった中途半端な気分。大峰山の絶壁からロープで縛られて、前にヒョイと出された時、それはたしかに恐怖なんでしょうけれども、仮にロープで縛ってぶら下げられた状態のままじっとしていると、きつと恐怖とは違った感情になってくるんだと思うんですね。いつロープが切れるかなあとか、このロープは丈夫だろうか、夜は寒くなるかなあ、などと変に落ち着いてくるわけですね。落ち着いてくるんだけれども、といって幸せではない。こういう状態を不安と言うのだと思うんです。もちろん不安と恐怖は密接に関係しているんですが、不安とは、どのくらいすると助けが来るかなあとか、このまま日が暮れるんじゃないか、今すぐ死にそうではないけれど何日もつかないか、そのうち助けに来てくれるんじゃないかとか、そういう状態ですね。

不安ということを宗教と結びつけて考えられるのではないかと思ってお話しているんです。実は、私たち自身は今、現在、まさに不安の中にいるんです。生きていてということが不安の原因なのです。いつかは切れる命というロープにぶら下がっているわけです。必ず皆さんは死ぬわけで、つまりロープはいつか切れるんです。本来そういう状態にいるわけです、気が付かないけれども。だけど何かの機会に不安な状態を思い出すと、そこであれこ

れ考え出す、それを迷いと言うわけですね。足が地に着いているとか言いますが、人間は全てこの宙ぶらりんな状態にいるわけですよ。それをあれこれ気にし出すと、人によってはおみくじを買うとか神社に願をかけに行くとか。そのくらいならたいしたことないんですけどもね、いろんなことが起きてくるわけです。

### 迷信に逆戻り

私は二年程前に沖縄に通って、沖縄の宗教についての連載をしたことがあるんです。沖縄には「ユタ」という人がいまして、運勢を占ったり魂を鎮めたりと、そういうことをやってくれているわけなんです。その「ユタ」の人に会って話も聞いたんです。ユタに見てもらおうと、「明日はあっちの方へ行っちゃいけませんよ」なんてことを言われたりするわけです。沖縄の人たち、特に女性はたいがい行っているんですね。東北大学のある先生が調べたところによると、沖縄の五十歳を過ぎた女性で「ユタ」の所へ行つたことのない人は二割くらいしかいない。あとの八割は最低一回は「ユタ」にお世話になっているという統計があります。何かというところへ行くんです。病気になる、交通事故にあった。何か起こると、「ユタ」の所へ行つて相談してお金を払って見てもらおうわけです。首里のあたりには「ユタ寺」というのがありまして、仏教のお寺なんですけれども「ユタ」を受け入れているお寺がいくつかあります。そういう所を何箇所か回って一日付き合ってもらおうと五万円くらいのお礼をしなきゃならんです。それでも良くならないとなると、また別の「ユタ」を頼んであちこち回ってもらおう。本土の北の方でも、例えば下北半島の恐山おそれざんに行きますと死者の霊を呼び出してくれる「イタコ」という人たちがいます。こうした口寄せをする巫女ふじよやシャーマンというのは、大昔から世界各地にいたのです。

そういうことはもう滅びたのかといえは、最近の若い人は星占いとか血液型占いなどに大変関心がありますね。

ひと昔前までは、マルクス主義の人は「伝統宗教が減れば無神論の社会が来る」というようなことを言っていました。だけど、私はロシアにも取材に行ったことがあるんですけども、ソビエト時代から現在に至るまでロシアの人は非常に迷信が好きなんです。祈祷師や占い師などが非常に多い国です。あそこでは唯物論を七十年間教えただんですけども、ソビエトが倒れた途端に、日本のオウム真理教、統一教会、あまり具体的な名前を言いますと問題がありますけれども、いろんなものがいっぱい広がってしまった。ですから私は「伝統宗教が減れば無神論の社会が来る」というのは間違いで、実際は「伝統宗教が減れば迷信の社会に逆戻りする」という感じがしました。ソビエトの場合、一見科学的で理屈に合ったことばかりやっていたように見えたけれど、やっぱり漠然とした「不安」が背景にあったんだろうと思うんです。ソビエトの人だって、さっきお話ししたように、命というロープでぶら下がっているんですね。残念ながら、全ての人間がそうなんです。例外はない。ですから、唯物論の国の人でも死というものについて考える時はあるはずなんです。そういう不安の中に生きているのに、無理やりそういうことを考えないということにしたわけですから、どこか無理がある。表向きは考えちゃいけないことになっている。共産党の幹部の人でさえ、陰ではご祈祷だとか呪術に頼っていた。これがソビエトの実態だったと思うんです。ソビエト時代から現在も続いている有名な科学雑誌があるんですけども、モスクワでその編集長に会ったことがあります。以前からその雑誌はおしまいのほうのページに星占いを載せているんですね。「何で科学雑誌に星占いがあるんだ」と聞いたたら、「星占いが絶対間違っているとは言いい切れないし、実はこれが結構、評判がいいものだから」と苦笑していました。

とにかく人類は登場以来、数万年か、もっとでしようけれど、死という不思議なことを前にどう対処したらいいかということはずーっと悩んできたんだろうと思うんですね。ですから魑魅魍魎ちみもうりょうとか魔術とか、現代の言葉で言え



ばオカルトとか、あるいは精神世界といったものが今も人気がありますけれども、そういう中で過ごしてきた。しかし二五〇〇年くらい前にお釈迦様という人が生まれて、それからソクラテスとか孔子とかイエス様、そういう人たちが現れて、大変な進歩をしたわけです。魔術とか呪術とかそういう世界から抜け出そうとしたということですね。この進歩はすごいと思うんです。それまでお化けなどにおののいていた人類が、二五〇〇年前から五〇〇年くらいの間にそこを脱却する思想をもったということなんです。ところがそれから二千年ほどたって、何故かまた「エリアン」とか「ハリー・ポッター」や「もののけ姫」に戻ってしまったわけです。二一世紀になる頃になって、また「不思議」というようなことに逆戻りしつつある。とうに克服されたはずなのに、何故か逆戻りしている。これは本当におかしな話だと思っんですね。

これについては、過去にいろいろな宗教者や哲学者がいろいろなことを言ってきています。たとえば『臨濟録』には、《但有（あらゆ）る来者は、皆な受くることを得ざれ。爾なんじが一念の疑は、即ち魔の心に入るなり》（示衆八、岩波文庫、一九八〇年）とあります。入矢義高先生の訳ですと、「外からやってくる物は、すべて受け付けてはならぬ。君たちの心に一念の疑いが浮かべば、それは魔が心に侵入したのだ」ということになっています。あるいは、西田幾多郎という方は《仏教に於て観ずると云ふことは、対象的に外に仏を観ることではなくして、自己の根源を照すこと、省みることである。外に神を見ると云ふならば、それは魔法に過ぎない》（『場所的論理と宗教的世界観』、岩波文庫『西田幾多郎哲学論集』第三卷所収、一九四五年）と書いています。要するに、己の外に何かあって、それがこつちを脅かしているんだというようなことは迷いだよと、こういうことをいつているんだと思うんですね。

私の担当している大学の授業では、春早々、学生諸君にまず「変なものがいろいろ外からやってくるから、気を

付けなさい」とお話しするんです。昔は墓場で幽霊みたいなものが恐かったんですけども、今恐いののは駅前なんです。駅の前で、「署名してください」とか「アンケートをお願いします」なんて近寄ってくる人がいますね。あれは非常に危ないわけです。うっかり署名なんかしますと、すぐ電話がかかってきました、「一緒にこういう勉強をしませんか」と誘ってくる。出掛けて行ってだんだん話しているうちに、「地球の終わりが来ますよ」とか、「あなたの血液が汚れている」とか脅される。「それにはこうしなければならぬ」とか言って、壺を買わされたり高価なものを買わされたりする。そのうちに今度は自分が売る側に回されて、最後は合同結婚式に行くとか、そういうようなコースもあるわけです。こういうことはとっくの昔に、偉い宗教者たちが「そんなのはおかしいよ」と言っていたんですがね。

例えばお釈迦様の言葉にもあります。『ブッダのことば』という岩波文庫から出ている本には「わが徒はアタルヴァ・ヴェーダの呪法と夢占いと相の占いと星占いをおこなってはいけない」とあります。こういうことをお釈迦様は昔から言っておられるわけです。聖書の中にも、旧約聖書ですからユダヤ教の聖書ですけども、「天を仰ぎ、太陽、月、星といった天の万象を見てこれらに惑わされ、ひれ伏してはならない」と書かれています。

### 宗教と脅し

伝統宗教の中に、恐さ、脅かしというようなものがないかという点、結構、古い宗教は脅したり恐がらせたりという点で成り立っていた面もあるんですね。一番わかりやすいのは、神社神道では「かしこみ、かしこみ」と言いますが、あれは「畏」という字なんです。こわい、こわいという表現なんです。そういうどちらかという点と古代からつながっている宗教というのは、恐がらせる、恐いという感情がかなり先に立っているのです。これは

ユダヤ教やキリスト教の中にもあるんですね。プロテスタントの作家で、だいぶ前に亡くなりましたけど、椎名麟三さんという方がおられました。この方の『私の聖書物語』（中公文庫、一九七三年）を読んでいましたら、『聖書の多くの場所に、右にかかげたような威嚇いかくが鳴りひびいている。僕は、臆病なくせに、また恐らく臆病だからでもあるだろうが、このように威嚇されると、何を、という気になるのである。そして僕が宗教一般に対して嫌悪を感じるのは、めいめいの始祖が、腹だたしくもそれぞれの威嚇の発明者であるということである。そして僕は、何もこんな威嚇なら、神なんかをわずらわさなくても、人間で十分だと考える』とありました。これは本当にそうなんです。聖書の中にはいっぱいあるんです。例えば雷とか地震です、古代人に恐れられたのは。旧約聖書の《角笛の音がますます鋭く鳴り響いたとき、モーセが語りかけると、神は雷鳴をもつて答えられた》（出エジプト記一九・一九）とか、《主は逆らう者を打ち砕き／天から彼らに雷鳴をとどろかさされる》（サムエル記上二・九）とあるのです。これはユダヤ教とキリスト教の聖書ですけども、イスラムの教えにもこういうのはいっぱいあるんですね。『コーラン』（井筒俊彦訳、岩波文庫中巻）には《人間どもよ、汝らの主を懼れよ。まこと、かの時に起る地震は恐ろしいもの》（二二・一）とあります。地震は神の怒りの象徴とされたんですね。雷と地震の表現はあちこちにあります。日本人は地震は慣れっこですけども、イスラエルやあの辺には地震がそうないのでしょうね。たまにあらると大変、それはもう神が怒ったことだというふうに思ったんだろうと思います。

これは、仏教にももちろんあるわけです。その一番良い例が地獄という発想ですよ。例えば「奈落の底」なんて言いますが、奈落というのはもともとサンスクリットのナラカという言葉からきているんだそうです。それから、「六道を輪廻する」と言いますが、地獄・餓鬼・畜生など、そういう所を人間は輪廻するということのようなことが言われていたわけですね、古代インドでは。それから源信そうず僧都の『往生要集』というのがありますね。地獄

の話がいっぱい出てくる。『阿弥陀経』というのにはお浄土の姿が書かれてあります。孔雀が飛んでいて、金色の建物があつて、ダイヤモンドや宝物がいっぱい散りばめられた池がある、とかそんなことを書いてあるんですが、何となく嘘っぽい。ダンテの『神曲』というのを読みますと、天国の話が出ていますけど、これも何かおもしろくない。おもしろいのは、『神曲』にしる『往生要集』にしる、地獄の描写なんですね。これは凄まじいですよね。これでもかこれでもかというくらいに恐い話がでてくる。それで椎名麟三さんは「何で宗教というのはこんな恐い話ばかり好きなんだ」と怒っているわけです。「それに比べて、極樂は何と情けないほどの描写なのか。金銀やダイヤモンドで飾り立てた極樂なんかよりも、中村屋のカレーライスでも食わせてもらった方が、よっぽど天国らしい気持ち味が味わえる」なんて書いてありました。とにかく、むかしの人は、宗教心を植えつけるには恐い話をしたほうがいい、と思つたんじゃないでしょうか。もちろん私たちの周りには不思議というふうに感じるものもあるわけです。例えば、金子みすゞという詩人の「不思議」(『金子みすゞ全集』所収、JULA出版局)という詩があります。

私は不思議でたまらない、

黒い雲からふる雨が、

銀にひかつてゐることが。

私は不思議でたまらない、

青い桑の葉たべてゐる、

蠶（かいこ）が白くなることが。

私は不思議でたまらない、

たれもいぢらぬ夕顔が、

ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、

誰にきいても笑つてて、

あたりまへだと、いふことが。

こういう詩を読むと、不思議というのもいいなと思うんですね。感動するわけなんです。ただ問題は「不思議」ということをだんだん拡大解釈していきますと、すこぶる怪しくなるんです。不思議を大げさに考えないほうがいいと思うんです。先ほどの西田幾多郎の論文「場所的論理と宗教的世界観」には《靈性的事実というのは、宗教的ではあるが、神秘的なるものではない。元来、人が宗教を神秘的と考えること、その事が誤である》、あるいは《人は往々宗教を神秘的と云ふ。併し宗教的と云つても、我々に特別な意識があるのではない。正法に不思議なしと云はれる》ということも書かれています。宗教というのは不思議とか神秘的とかそういうことと直接関係あるんじゃないんだよということをおっしゃっているんですね。さっきの金子みすゞさんの詩「不思議」も、この段階で止まっているならいいんです。不思議は不思議である、と。しかし、不思議だから神様がいて、不思議だから仏様

がいる、というふうを考え出すとちよつと怪しくなる。それが西田さんの考え方なんじゃないかと思うんですね。北原白秋という詩人にも《薔薇の木に 薔薇の花咲く あなかしこ 何の不思議もなければ》という作品があります。バラの木にバラの花が咲くのは、さっきの金子みすゞさんの感覚からいえば不思議なんですよね。だけど北原白秋は「何の不思議もなければ」と断っているんですね。抑えているのです。

今日、何故こんな話をしているかと申しますと、ひとつはカルトの問題なんです。私は新聞記者だったものですから、オウム真理教事件のことも取材しました。カルトといえないかもしれないけれど、ヤマギシ会なんてのもありました。ともかく、いろんな団体があります。この間も白装束集団というのがあつて色々騒ぎになりましたね。ああいうのをみていると、何か恐れとか不思議とか、そういうことを我々が心の隅っこで待ち望んでいる要素があるんじゃないかという気がするんです。そこに踏み止まればいいんですが、最近の風潮を見ていると、意外にインテリ、あるいは大学生がスーッとそういう集団に取り込まれていくわけです。例えば、オウム事件の裁判を傍聴に東京地裁にいくと、目の前に麻原彰晃氏が座っているんです。ただのヒゲを生やしたおっちゃんのように見えるけれども、何でこんな人に慶応大学を出た人とか弁護士の人たちがついていったのか。やっぱり何か現代社会の中でそういうものを待ち望んでいる要素があるんだろうとしか思えないんですね。

#### 教育現場では

それからもうひとつお話ししたいのは、宗教教育の問題なんです。今、教育基本法を改正して公立の学校でも宗教教育をやるとうとうというようなことを言っている人がいるんですけど、しかしそういう政治家などの話を聞いてみますと、その人たち、実はあまり宗教のことを深く考えているわけではないんですね。宗教を学校で教えれば何と

なく従順な、親の言うこと、あるいは先生の言うこと、上司の言うことを聞くおとなしい人間が育つんじゃないかというふうに勘違いしているんです。つまり、まさに「宗教はアヘンなり」というふうに思っているわけです。そういう人たちが宗教教育をやるうと言っているんじゃないかという気がしてしょうがない。例えば、今日話していることかというと、「畏敬の念」ということなんです。今の学校では道徳教育というのをやっているわけですから、「も、その中で「畏敬の念」というのを教えることになっている。中央教育審議会というのが一九六六年に「期待される人間像」というのを発表したんですけれど、そこで、「生命の根源すなわち聖なるものに対する畏敬の念」を教えよ、と言い出したんですね。ですから、現在の学習指導要領では、「人間の力を超えたものへの畏敬の念」を教えるということになっているんです。それがどういうことかといえ、「不思議というものを大切にすることを教えるということになっているんです。これがなかなか問題なんです。「人間の力を超えたもの」というのは何なのか。これが討議された頃は、決めた人たちの頭の中には「人間の力を超えたもの」はすばらしいものだという前提があつたんだらうと思うんですね。宗教はいいものだ、畏敬の心をもてば人間は良くなる、というふうに考えただらうと思うんです。ところが、オウム事件というのが起きてみると、「畏敬の念」を持つことはすごく危ないことなんじゃないか、という面も出てきているわけです。昔は、神様仏様といったら良いもんだと決まっていたのですが、オウム真理教のシバ神、ああいうのだったらどうなるんだというふうに心配が出てきた。

問題は、教える側の先生ですよ。先生自身が人間の力を超えたものをどう見ているか。学校を回ってみると、どこへ行っても校長先生は私と同じ年くらいの人間なんです。その校長先生と宗教についてお話ししますと、ほとんどの方は全くそういうことに関心がない。私が高校生くらいの時の校長先生を思い出しますと、もうちょっと宗教的な雰囲気をもっていたんじゃないかと思うんですけれども、今現役の五十代の先生たちと話をすると、ほと

んど怪しいですね。それはしようがないんです。私の経験で言えば、教師になるまでの学校教育で、そういう授業は何もなかったわけですから。親もたいして宗教心はなかった家庭で育ってきたのですから、これは仕方がないです。

現代の日本人が宗教心がないことを「戦後の教育が悪いからだ」と言う人がよくいますけれど、そうじゃないんですね。戦前も宗教は教えていなかったんです、日本の学校では。神道だけは、あれは宗教じゃないといって神社参拝に連れていったけれども、学校で宗教は明治以来教えられていないんですね。ただ、家庭なり地域にそういう雰囲気が残っていましたから何となくそういう関心はあったんでしょう。しかし、戦争に負けて、テレビがこれだけ発達して、アメリカの物質文明と言いますか、物質万能の世の中になって、電車の広告を見ればエッチな言葉がいっぱい書いてあるような社会になってしまった。そうになると、日本人の精神生活の底の浅さ、その現実があらわになってくる。誰も宗教のことをまじめに考える人はいないし、学校の先生だってそういう人はほとんどいなくなってしまうた、そういう状況なんです。五十代の先生がそうですから、ましてその人たちの息子や娘の世代が先生になっていけば、当然、宗教なんか何も関心がないわけですね。そういう状況で「畏敬の念」というようなことを教えられるでしょうか。取材してきますと、学校にはいろいろな先生がいます。熱心なのは、ある特定の宗教をもっている先生です。例えばエホバの証人の先生。あるいは、もっと大きい集団に属している方も多いけれど、いわゆる伝統宗教の人たち、たとえばこの曹洞宗系の先生などはあまり多くない。そういうところで「畏敬の念をもちましょう」などと教える教育が望ましいのか。本当に大丈夫なのか、ということになるわけです。



## 畏敬の念

更に、「畏敬の念」ということがどうなのかなあと考えていきましたら、結局、「畏敬」ということ自体が宗教の基本なのかということに思い至りました。さっき言いましたように、畏敬の「畏」というのは「おそれ」という字なんです。人間を超えたものへの畏敬の念をもつ」ということはどういうことかと考えてみましたら、鈴木大拙さんがこういう言葉を書いているんですね。《自分の力の及ばぬところに何かを求めるといふことは、いつも不安の状態を起すものである。力及ばぬところは吾不關焉（われ関せず）でおればよいのだが、どうもさう行かぬところがあるので、捨てるには捨てられず、取らうにも取られず、いつも不安の心におびやかされてゐるのが吾等凡夫の生活である》（『新興宗教と迷信邪教』、岩波書店、旧版『鈴木大拙全集』第二十九卷所収、一九三五年）。つまり、さっきの人間の力を超えたものというのは、大拙さんがいう「自分の力の及ばぬところ」。それから、畏敬の念というのは実は「不安の心」ということなんじゃないかというふうに思い当たったんですね。聖書には「主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない」という言葉がありまして、一見、「畏れ敬え」が宗教の本質のように普通はよく言われているわけです。しかし、よくよく考えてみると、「畏れ敬う」という感情は、「敬う」は尊敬ですから構わないんですけど、「畏れる」という方は科学があまり発達していない時代の恐怖感情というのがもともとなっているんじゃないかと思うんですね。昔は自然は恐ろしいものだったわけです。地震とか雷が何故おきるのかわかりませんでしたし、日食とか伝染病というものも神の怒りとしか見えなかつたわけです。だけど、科学がだんだん発達しまして、これは無知からだったということがわかってくると、一体、恐れ、恐怖というようなものを土台にした宗教のままでもいいのか、と思えてくる。畏れが基本だとすると、科学が発達すればするほど、当然宗教はつまらんものだという事になってしまいます。

恐がる、恐れるということを経典の基本としていたのは古代なんです。昔は確かにそうだったんです。旧約聖書のユダヤ教の時代は「畏れ敬え」「畏み、畏み」だった。けれども、イエスという人が生まれてキリスト教になってくると、だんだん変わってくるんですね。今、日本でもっとも使われている聖書は新共同訳というのですが、神へのおそれは「畏怖」の「畏」を使って、ライオンや幽霊がこわいというような普通のこわいという字は「恐怖」の「恐」を使っているんです。そこで、神への畏れの「畏」という字が何回出てくるかを調べてみました。すると、旧約聖書には、これは本来、ユダヤ教の聖典なんですけれども、神へのおそれ、「畏怖」の「畏」という字は二六三回出てくるんです。しかし、新約聖書、つまりイエスが生まれた後にできた聖書には二五回しか出てこないんです。十分の一なんです。神をこわがる感情はぐんと減っているのです。

仏教ではどうでしょうか。そう思って「畏」という字を探してみました。中村元先生の『佛教語大辞典』（東京書籍）でひいてみますと、ほとんどないんです、仏教には。出てくるのは「施無畏」という言葉です。「せむい」と読めます。それから、「無畏」という言葉が出てくるんですけれども、「畏れ」という言葉はほとんど出てこないんです。やはり、古代インドの思想が途中から変わったわけですね。バラモン教の時代は確かにおそれていた。だけど、そこにお釈迦様が生まれた。『法華経』を読んでみますと、「この観世音菩薩摩訶薩は怖畏おそれの急難きゅうなんの中にいて、能く無畏を施す。この故に、この娑婆世界に皆これを号なづけて施無畏者となすなり」という言葉があるわけですよ。この「施無畏」というのはどういう意味か。字は「畏れが無いことを施す」という意味なんですけれども、実は観音様のことなんです。ですから、昔は、観音様の像を船の舳先に取り付けて、遭難が無いようにと祈った。古代インドの時代からそういうことがあったみたいです。日本でも山登りをしていて遭難現場にさしかかると、観音様の石像が建ててあります。観音様という意味は、本当は観自在菩薩って言いますよね。つまり自在に観ると

いうことです。とらわれないで観るといふことです。特定のもの、幽霊や亡霊など外からやってくる恐いものに対してとらわれないといふことだろうと思うのですね。畏れなくていい。そういうことを言っているわけで、それを象徴的にあらわしたのが観音様なんです。その他、とにかく仏教では畏れというのはあまり関係ないと思うんです。例えば阿弥陀様とかいろいろいな仏像を見ていて、恐ろしいという感情はないですよ。いやあるよ、金剛力士像とか、そういうのがある、とおっしゃる方もおられるでしょうが、あれは仏様ではなくてバラモン教の時代、ヒンズー教の神なんです。仏を守る存在であって、仏様自身は穏やかな顔をなさっていると思うんです。ですから仏教では「畏れ」という感情は本来は否定されるものとしてあるんじゃないでしょうか。冒頭で紹介しました清沢満之という方もこう言っているんです。《怖畏の情は、我の他に侵害せらるることを怖畏するなり。既に己を忘れて無我の心に住するものは、怖畏の情を滅殺し得べきなり。而も尚怖畏を免れざるあるは、無我心の確立せざるにあるを反省すべし》（『有限無限録』六九、岩波書店『清沢満之全集』第二卷所収、一〇〇二年）。つまり、恐いとかそういうことを言っている人はまだ仏法がわかってない、もっと勉強しなさいと、こういうことが書いてある。

### ルソーの警告

というわけで、道德教育で「畏敬の念」を教えることは宗教的に見ても逆なんじゃないかというのが私の意見なんです。「何かを怖がりました」と教えるといふことは、さっきのカルトの神様を恐がることに通じるわけですから、むしろ道德教育でやることは「恐れなくていい」といふことを教えずにはいけない。恐れなさい、恐れなさいと教えるのは非常に危うい。例えばジャン・ジャック・ルソーという人も十八歳くらいまで宗教について変なことを教えないほうがいいと言っているですね。『エミール』という有名な本の中で、十八歳でもまだ早すぎると

というようなことを書いていらっしゃるんです。その理由は《神の奇怪な姿を子どもの精神にきざみつけることの大きな弊害は、それが一生のあいだ子どもの脳裏に残っていて、大人になっても子どもじみた神のほかには神というものを考えなくなることだ》（今野一雄訳、岩波文庫、中巻、一九六二年）と書いてあります。どういふことかといえは、キリスト教系の幼稚園ならクリスマスがあり、仏教系の幼稚園なら花まつりがありますよね。そういう時に、キリスト教系の幼稚園では神様の話をするんですけども、これは幼稚園だけじゃなく我々の家庭でもよく言うことですが、神様というとなんとなくヒゲの生えたおじいさんが雲の上にいるというような教え方をするわけです。仏教でも極楽とか地獄の話をするわけですけども、それに類した子どもっぽいイメージを与えるわけです。そうすると大人になると、**「宗教なんて子供騙しのものだ。ばかばかしい」というふう**に思っていくわけです。幼稚園の先生たちは神様を教えて良かったと思っているかもしれないですけども、その神様がずーっと同じなんです。そうすると早い子どもは中高生になりますと、**「アホらしい」と**言っていて宗教から離れていく。地獄なんて、そんなものは、と**こ**ういうふうになるわけです。考えてみると、幼稚園くらいの時に、**「赤ずきんちゃん気をつけて」と**か**「クマのプーさん」と**か色々な童話を読むわけです。**「オオカミさんが来て、赤ずきんちゃんを食べちゃいました」**みたいな話を聞くと、何かオオカミがかわいい存在みたいに見えますよね。ライオンさん、クマちゃん、みんなかわいい。だけど、普通の教育では熊は実は恐いんだ、ライオンは肉食動物だ**つて**ことをどこかで教えて、修正していくわけです。ところが宗教の教育については**そ**ういうことはあんまりやらないんですね。幼稚園でなら**つた**神様がそのまんまずーっと大人までつながっていく。そうすると、みんな途中で宗教が馬鹿馬鹿しくな**つて**離れていく。だからそんなことするんだ**つたら**教えないほうがいい、とルソーは言っているわけです。では**本**当の宗教心**と**いうのは何なのか**と**いうことをそろそろお話ししなければなら**な**いんですけれども、とにかく**「恐れる」**なんて

いうことよりはもっと深いものなんだということをお話ししたいんです。

### 絶望と孤独

私は本日、まず、恐怖とか心配からは本当の宗教心は生まれないというお話をしました。恐怖とか心配というのは外からやってくるものなんです。本当の宗教心というものはそういうものじゃないんじゃないでしょうか。恐怖から不安へ、さらに不安をもっともって考えて更に突き詰めていくと、「絶望」ということに行き着くんですね。不安定な、中途半端な状態じゃなくて、もっと煮詰めていくと、最後は「希望は全く無い」という段階になる。実は、そういう段階にまで進まなければいけないんじゃないかと思うのです。さっきの話で言えば、絶壁からぶら下げられて一瞬恐いんだけど、後ろからすぐ引つ張り上げて戻してくれるということがわかっていいるんですね。だから、その一瞬だけ恐いけれど、ちよつと我慢したら引き上げてくれるんで深い宗教心には行き着かないんです。もし仮にそれがぶら下げられたままで引き上げてくれない状況に追い込まれた、それをしかと認識したとすると、それは絶望というんだと思うんです。未来はない。とにかく何も無い。やけくそになって、仮に自分で縄をほどいて落ちたって、本当に絶望しているのなら、死んでからその先に何かがあるとも思えない。本当の絶望には、将来の天国も地獄もないはずですから。つまり、死んでも救いが無い。そういう状態に追い込まれなきゃいけない。そこまでいかないと、本当の宗教は見えてこないんじゃないかなという気がするんです。八木重吉というクリスチャンの詩人に、こういう作品があります（『定本・八木重吉詩集』所収、弥生書房、一九五八年）。

このかなしみを

よし　とうべなうとき

そこにたちまちひかりがうまれる

ぜつぼうとすくい

はかないまでのかすかなひとすじ

簡単には逃げ出せない状態で、もうどうしようもない絶望をしかと受け止める。この「よし　とうべなう」とは、肯定するということです。そうすると、どこから聞こえてくる、何かが見えてくる。それが本当の宗教への道なんじゃないかと思うんですね。例えば秋の日に、どこか美しい山などに登ってひとりポツンとしていると、何か感じるんですね。ああいいなあ、というふうに。ひとりで山の中で寝ころんでいますとそう思うんです。そこには恐れとか恐怖という感情はないんですね。悪魔とか魔とか、そういうようなものを感じるんじゃないんですね。これは畏怖感情などとは別の感情なんじゃないかと思うんです。何かもつと温かい感情ですね。ですから畏怖とは逆の感情が宗教というものに導くのではないかと思うんです。ロープの話で言えば、ロープでぶら下げられている。でもそこでしょうがないと思ってぶら下がっていると、少し天気もポカポカとしていい気分になってくる。風も爽やかに吹いてくる。おっ、これもいいなと、こう思う。それが宗教の本当の入口なんじゃないかと私は思うのですね。お釈迦様とかイエスという人のものを読んでみると、こういう温かさを感じる時があるんです。旧約聖書でも新しいほうの文章になりますと、《死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れぬ。あなたがわたしと共にいてくださる》（「詩編」一一三・一一六）というような詩があります。あるいは新約聖書には《愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します》（「ヨハネの手紙一」四・一八）という言葉も出てきます。それから『法句経』（ダ

ンマパダ、岩波文庫『真理のことは・感興のことは』所収、中村元訳、一九七八年）にはいつぱい恐れを否定する言葉が出てくるんです。たとえば《愛するものから憂いが生じ、愛するものから恐れが生ずる、愛するものを離れたならば、憂いは存在しない。どうして恐れることがあるのか？》（二二二）とあります。愛するものっていうのは執着ですね。愛欲と言ってもいいかもしれませぬ。簡単に言えば、助かろうとするから憂いが生ずる、うまくやろうとするから恐れが生ずる、そういうことをやめてしまえばそんなものはないんだ、ということを行っているわけです。ですから先ほどの八木重吉の詩でいえば、「このかなしみを／よし　とうべなうとき」の、「よし　とうべなう」、受け入れるということがすごく大事なんじゃないかと思うんです。そうすれば「たちまちひかりがうまれる」。そこはそう簡単にいくかどうかかわからなくて、なかなか難しいですけども、八木重吉の場合はそういうことがあつたんでしょう。

私の家のそばに、登山の随筆で有名な串田孫一さんという人がおられるんですね。今八十七歳くらいですけど、この方は山登りをずっとやられてきて、五十を過ぎてから腰を痛めてあまり登っておられませんが、いろんなエッセイを書いておられます。特定の信仰をもつてなくて、敢えて言えば無神論という立場かもしれないですね。宗教的な人なんだけども、特定の宗派に所属していないというか、神様を信じるという人ではないんです。少し親しくなった時に、「先生は死ということは恐くないんですか」とお聞きしたことがあるんです。つまり、宗教をもたないでもいいんですかというようなことをお聞きしたら、「そんなことあんまり考えないんだよな」というふうにおっしゃるんですね。それで「どうしてでしょう」と言ったら、「私は山登りを結構してて、ひとりでもよく野宿をするんです」とおっしゃるんですね。確かに若い時のご本を読んでもみますと、昔ですから相当装備も悪かったんですけども、木の下でカッパを上一枚かけて仮眠をするとか、そういう話がよく出てくる。ひとりで結構奥のほうの

山へ行つて野宿しているんです。「そういう時は恐くないですか」とお聞きしたんですけど、「山へ登ってたら恐いなんて考える暇ないですよ。ずっと歩いてヘトヘトになっていて、暗くなってきてひとりで食事を作って食べて、横になったらすぐ眠れます」と言うんですね。それを十五歳くらいの時から繰り返しておられるわけなんです。私も山登りをするんですけども、楽な山はダメなんです、雑念が湧いてしまう。会社のことや仕事の事を思い出してしまう。しかし、きつい山を登っていると、確かに全くそんなこと考えなくなる。森の中でも、一人でテントを張って、急いで食事を作って、寝袋にもぐりこむとたちまち眠れます。串田先生をみると、やっぱり一種の孤独に慣れておくということも大事なのかなという気がするんです。

### 孤独のレッスン

現代の私たちは、「孤独」というのに慣れていないんですね。昔の人はもつと孤独というものと付き合っていたんじゃないかと思うんです。今の子どもたちや若者だけじゃないですけども、歩きながら、電車の中で、携帯電話で話してますよね。昔は家にたくさん兄弟がいて、子供部屋なんて持てる人は少なかったですけども、でも学校の行き帰りはわりとひとりになれたんです。電車通学なんかしていると、その間はひとりだったんです。ところが今は電車の中でも歩いていても携帯電話を使っている、自分の家に帰ると子ども部屋はあるんだけども、パソコンの電子メールでおしゃべりしている。それから旅行にしても、昔の人はもつとひとりで旅行したんじゃないかと思うんです。でも、今は大人になっても団体旅行が多いんです。中年になるとJTBや近畿日本ツアーリストなどの旅行がいっぱいあって、みんなそういうところで一緒に行くんですね。登山でも旅行会社がツアーを組んで来ていまして、本当にかっかりしちゃうんです。私は団体旅行もいいけれど、たまにはひとりになったほうがいいんじゃない



やないかと思うんです。女の人でも最近は泊めてくれるようになりましたから。山奥の温泉なんかに行きますと、ちよつときたない部屋に通されます。テレビもない部屋でポツンとしていますと、最初は寂しくて、あるいは手持ち無沙汰で困るわけですけども、でもそこで座禅をする人は座禅をされてもいいでしょうし、念仏なら念仏でもいい。そういうトレーニングが今私たちにはあまりにもないんじゃないかという気がするんですね。時々は恐いという感情におそわれることもあると思うんです。ちよつと気持ち悪いなあなんて思う時もあるでしょうが、それに慣れておくということが案外大事じゃないかという気がします。

私は三年くらい前ですけども、山形県の月山に十一月の中旬に登ったことがあるんです。新庄という東の方から入りまして、ずーつと歩いて行つて避難小屋に一泊しまして登ったんです。雪が十センチくらい積もっている時間で、もう誰もいないんです。翌日午後、湯殿山という方に下りたんですけども、途中、一人も人に会わなかったのです。泊まった小屋は念仏ヶ原避難小屋、途中には地獄池だとか浄土ヶ原だとか、何だかちよつと気持ち悪い所がずーつとあるんですけど、そういう所を通り越して月山の頂上に着いて、それから下りてきて、二十八時間ぶりくらいにキノコ採りのおじいさんに会ったら、思わず「こんにちは」と声が出たんですね。夏の上高地なんかで歩いていると、「こんにちは」「こんにちは」とやたら言われて、うるさくなるくらいなんですけれど、さすがに二十八時間ぶりて人に会いますと、心の底から「こんにちは」って出るんですね。むこうはそんなに話したそうでもないのに「いやー、山の上は大変でしたよ」なんて、こっちの方がおしゃべりになっている。

山登りはそれほどたいしたことじゃないですけど、結局、孤独とか絶望とか、そういうようなことを経てこそ、人は人に出会うことが心から嬉しく感じるのではないのでしょうか。そうしてこそ、人間同士の共生とか連帯とかの喜びも出て来るように思うのです。そして、そういう孤独のトレーニングをしないと、いざという時に恐れに

ひれ伏したり、あやしいものに負けてしまったりしてしまうんじゃないかと思うわけです。そういう孤独のレースが、今の時代には大切なんじゃないかなという気もしています。

今日はもう時間が来てしまいました。これで失礼します。